

## 家庭的な小集団生活施設における地域生活支援Ⅱ

### —共同生活の家「なずな園」と地域との共生—

岩 永 靖

#### 1. はじめに

本研究は、38年に及ぶ長期にわたり家庭的な小集団生活施設として、地域の中で障害者が共同生活を送ってきた「なずな園」の実践から、ノーマライゼーションの理念に基づいた障害者の地域生活支援のあり方について論究していくものである。

前稿（拙稿、2008）では、「なずな園」の実践について、試行錯誤期、役割出番期、関係発達期に分け、それぞれの時期においてどのような特徴があったのかについて論究してきた。

試行錯誤期では、その人をまるごと捉えその個の特徴を掴み集団の中で活かしていく。役割出番期ではその個の特徴を役割として共同生活の中で活かしていく。そしてその役割を活かすことで集団の中での独自性が認められ、個々の関係が豊かになっていく関係発達期に繋がっていくことを論じた。

このように前稿では、「なずな園」における自立支援について論じてきたが、「なずな園」の特徴として地域にとけ込んだ実践であるということが挙げられる。このことは「なずな園」の主宰者である近藤原理の父、益雄が実践してきた「のぎく学園」との違いでもある。

益雄は口石小学校特殊学級みどり組の担任として障害児教育に携わりながら、県内はもちろん他県からの入級希望者のために「のぎく寮」（のちの「のぎく学園」）を造り約30数名の知的障害児たちと生活をともにしてきた。その益雄が目指したものは「痴愚天国」という詩に代表される知的障害児の理想郷、村であった。

一方原理は、小集団で地域にとけ込みいずれは消えていく生活塾を目指した。それが「なずな園」である。「なずな園」は開設30年目で初めて葬儀を出した。重度の知的障害をもつSさん、62歳ですい臓がんであった。大晦日が通夜、元旦が葬儀であったが近所の人が炊き出しに手伝いに来てくれ、「よく歌を歌っていたあの人が・・・」と多くの人が見送ってくれたという。原理は、当時のことを「どれだけ地域にとけ込んだかは葬式の時にわかる」と述べている（近藤原理、1993）。ではこれだけ地域にとけ込んだ実践はどのようにして可能であったのだろうか。

本稿では、「なずな園」の地域交流を地域参加期と位置づけ論じていく。

#### 2. 方 法

「なずな園」に関する文献研究、近藤原理氏をはじめ関係者へのインタビュー、「なずな通信」等の資料を基に、「なずな園」の地域交流の特質を掘り起こしていった。

### 3. 生活支援における地域交流の意義

障害者福祉研究・実践の中で、地域生活支援は大きな課題である。また先駆的な実践の中から様々な地域生活支援モデルも生まれてきている。

その中で障害者や病者という捉え方でなく生活者という捉え方が1970年代より精神科ソーシャルワーカーの中でも広がってきた。谷中は精神障害者の障害を「生活のしづらさ」と捉え、生活支援の理念を「ごくあたり前の生活」とした（藤井達也、2004）。また谷中が取り組んできたやどかりの里の実践は、精神障害者を病者としてでなく、生活者として捉えていくことを重要視してきた。

社会学者の天野は、生活者とは「①生活の全体性を把握する主体をさす。②静的な形態でなく、『生活者』への生き方をかえていく一つのダイナミックな日常実践をさす」と定義している（天野正子、1996）。生活者という捉え方は、障害者や患者という役割の中で生き、施設や病院という生活環境の中で失われてきたあたりまえの生活を取り戻していくために非常に重要な意味をもつ概念だといえる。

原理も当初より、「まるごと生活者として捉えていく」と述べている。生活支援は、当事者を生活者として捉えることから始まると言っても過言ではない。

「なずな園」では、生活を共にしていく中で新たなものを作り出していった。敷地の中に1977年に離れをつくりそこを多目的利用として活用することにした。そこで西端の暮らしを共にする母屋、東端の豚舎や田畑のある仕事の家、そしてその中間に離れが完成し、原理があげている「生活、労働、文化」の3つの柱を位置づける生活基盤ができあがったと原理は言う。

後に1990年代に谷中が取り組んできたやどかりの里も作業所、グループホーム、生活支援センターという小さなセットを各地域に配置していくことで、働く場、住む場、憩いの場という精神障害者の生活支援に不可欠な機能を用意してきた。障害者が生活者として生活するための必要な機能がこの3つだといえることができる。

しかし、人は社会的な存在でもある。働き、住み、憩いだけでなく、様々な人々と社会的なつながりを持つことによって生きる喜びを得、生活者として生きる糧になるとも言える。

チャールズ・A・ラップ（Charles A. Rapp）は精神障害者のケースマネジメントの中で地域を資源のオアシスととらえ、生活空間の質は、利用可能な環境の資源によって影響を受けるとし、

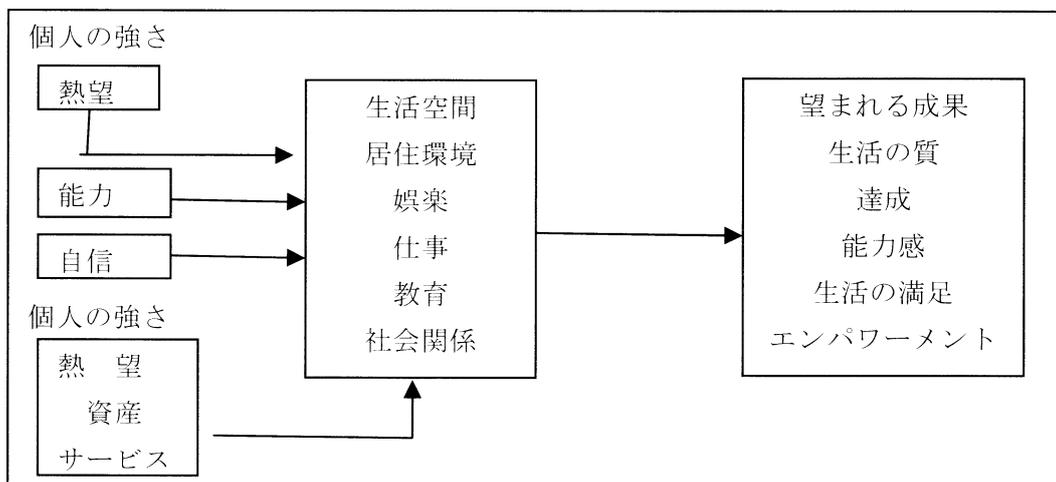


図1

図1のように示している (Charles. A. Rapp, 1998)。

この生活空間の中に社会関係を位置づけ、利用可能な環境の資源への接近が生活空間の質を高め、望まれる成果へと繋がると論じている。

また、藤井はやどかりの里の実践から「生活の支え合い (ソーシャル・サポート)」に焦点をあてた研究を行っており (藤井達也, 2004)、寺谷はソーシャルワーク実践の要素を図2のように示している (寺谷隆子, 2008)。

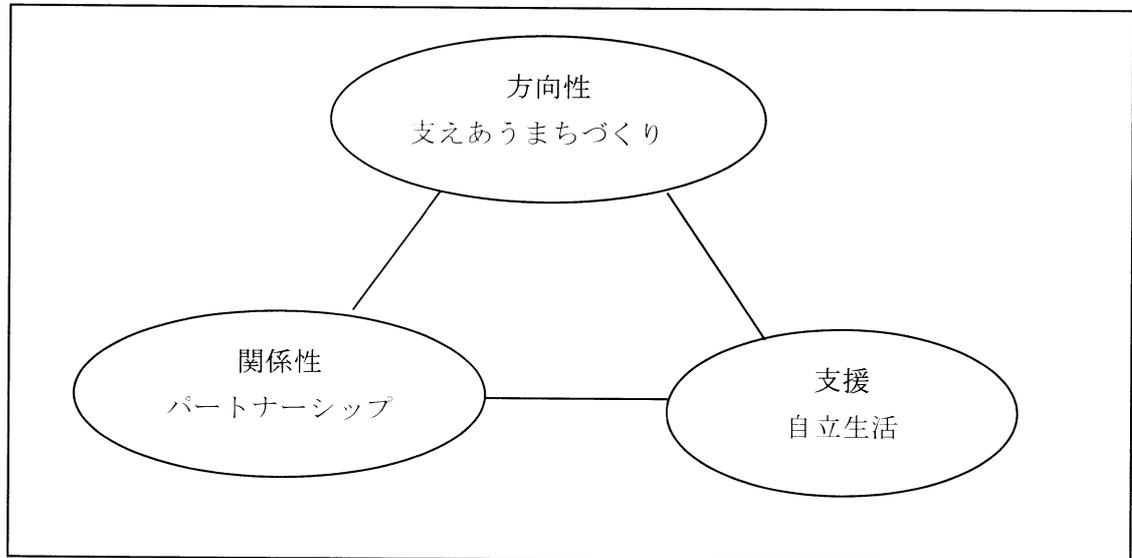


図2 ソーシャルワーク実践の要素

寺谷のソーシャルワーク実践の要素は、そのまま「なずな園」の実践にも当てはめることができるが、この中の支えあうまちづくりが「なずな園」でいう地域にとけ込むことを目指した実践と捉えることができる。

生活支援における地域交流は、支えあいを基盤とし、ソーシャルサポートである個人の社会的なつながりを増やし、生活の満足度と質を高めるものでなければならない。

## 4. 「なずな園」における地域交流

### 1. 「なずな園」の地域特性

まず「なずな園」の位置する地域の特徴について述べる。「なずな園」は炭鉱で賑わった街の一角にある。「なずな園」が開設された1962年当時は、「なずな園」の周りに炭鉱長屋が並び共同浴場が近くにあり、炭鉱の空気を抜く排気口もあちらこちらにあった。国道を挟んで炭鉱が並び、国道から東に200mほど入ったところに「なずな園」があった。炭鉱が廃鉱となり炭鉱長屋はその後住宅街となり、県職員住宅や町営住宅、一般住宅が立ち並んだ。多いときは300世帯近くが住んでいた。

国道向かいには、炭鉱の大きなスーパーがあり、郵便局、理髪店、駐在所、映画館、保育園が並び、国道の手前には「なずな園」の土地内にお寺があり、その入口に門前町のように4、5軒の商店が並び、食料品や日用品はそこで揃えることができたという。国道にバス停があり、南へ

下ると佐世保市内へ20分ほどで着き、北に行くとすぐ佐々町の市街地である。原理からの聞き取りから当時の「なずな園」近隣の地図を図3に示す。



図3 「なずな園」とその地域

「なずな園」の地域は9班まであり、「なずな園」も15軒位の班の中の1軒として入っており、原理の妻美佐子やスタッフである妹の江口も、この地域の町内会の副会長を長く務めてきた。

## 2. 「なずな園」の地域交流

この地域で「なずな園」と地域との交流はどのように進められてきたのか。3つに分けて考えてみたい。

まず「なずな園」自体の交流である。「なずな園」は法人でも福祉施設でもなく、一軒の農家であり、そこで原理夫妻とその2人の子ども、そして障害をもった10名前後が共同生活をしてきた。当時障害年金がまだなく、田畑で米や野菜を作り、豚を飼いそしてそれを出荷して収入にしていた。このように「なずな園」は一軒の農家として地域の中にあっただのである。

豚を佐世保の食肉センターに出荷し、温床でトマトやスイカ、ナス、オクラなどの苗を作り、その苗は近隣の人買いに来ていた。スイカも多いときは200個作り、「新鮮なトマトはありますか？」と近隣から問い合わせがあるとトマトを売ったり、近くのスーパーにも出していた。近隣の人が農機具を借りに来ることもあった。「なずな園」は近隣で暮らす人々が生活する上で必要な資源だったのである。

次に「なずな園」を支えたスタッフ、妻の美佐子や妹の江口の地域交流がある。前述したように町内会の副会長や民生委員を務めながら、農協とのつきあいなどあたりまえのつき合いを重ねていた。地域の集まりにもよく参加していた。

最後に、共に暮らしてきた障害を負わされた人たちの地域交流である。「なずな園」自体の地域交流が当事者の人たちの地域交流に大きな影響を与えている。トマトの出荷は自閉性障害のあるY君が届けていた。スタッフで来ていた伊藤は山歩きが好きでよく自然植物採取に参加していたが、それにも必ず誰か一緒に参加していた。また教育委員会の主催する郷土の史跡めぐりにも2、3人が伊藤と参加していたのである。

夏の町内の盆踊り大会は県職員住宅の手前の広場で毎年行われ、カラオケの好きなO君は必ず歌を歌い、重度の障害のあるSさんはその歌に合わせてよく踊っていた。原理の長男真が保育園の頃、傘を忘れるとO君が持っていってくれた。また佐々の町へは自転車や徒歩でそれぞれ自由に外出し、カセットテープを買ったり、本屋へ立ち寄り好きなテレビガイドや週刊誌、高校野球の特集号などを買ってきていた。佐世保の街に映画を観に行く人もいた。O君は地域の商店街が企画していたシールを集め旅行を申し込み、地域の人たちと日帰り旅行を楽しんでいた。

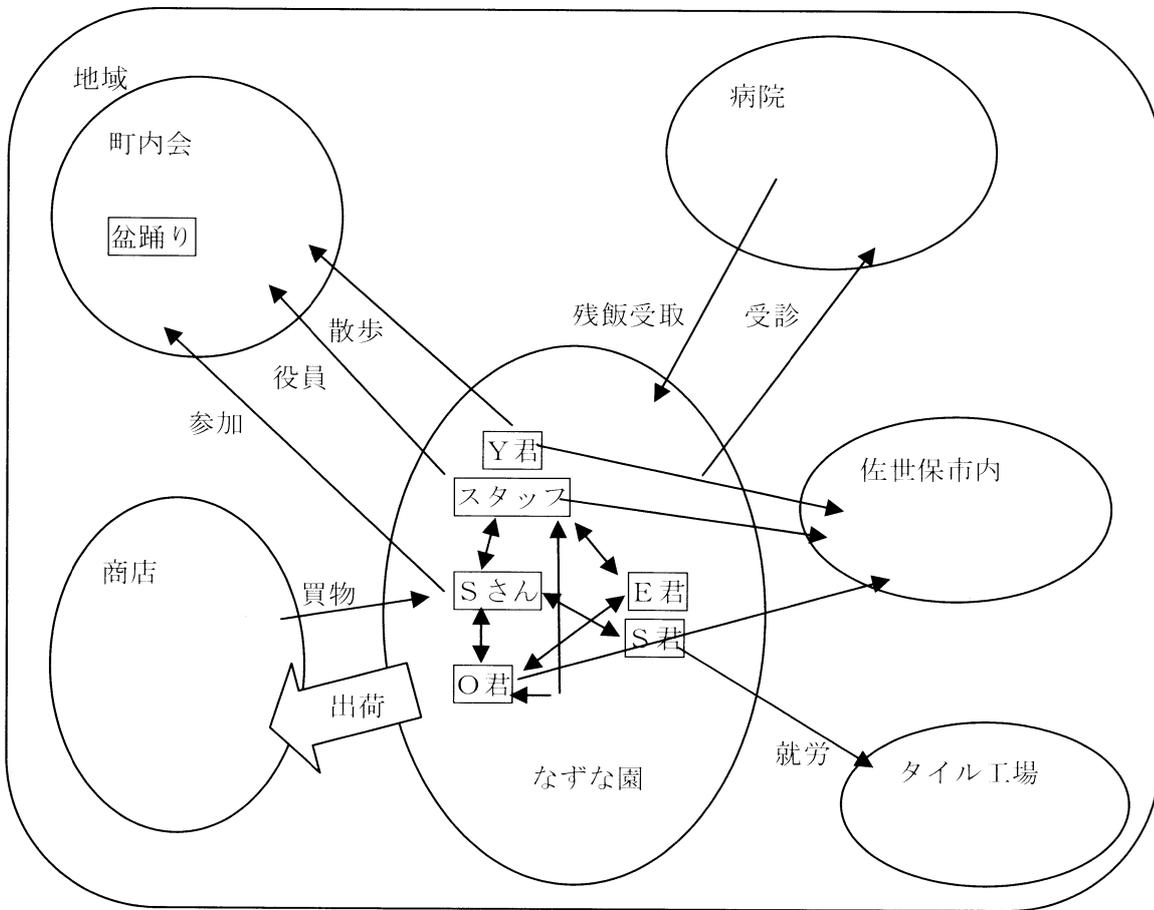


図4 なずな園と地域交流イメージ図

このように地域の資源を個人個人が自由に活用し、生活を楽しんでいた。自閉性障害のY君は国道より手前をよく散歩し、この町内の人たちの名前を全て覚えていた。中には仕事に行く者もいた。2人組みで、2.5km離れた佐々川河口にあるタイル工場へ働きに行っていた。宴会の時、社長の横にばかり座ったり、同じ歌ばかり歌ったりしていたがおおらかに受け入れられていた。

私たちが生活の上で活用する資源はそのまま当事者にとっての社会資源であり、それをあたり前に活用し地域にとけ込んでいたのである。図4にそのイメージ図を示す。

原理は、家庭的な小集団生活施設で実践するスタッフの条件を「共にくらす心得」として述べているが、その中で「近所と仲良く、地域にとけこんで。ひとつの『家庭』なので、近所づきあいも普通に。地域の子どもたちが遊びに来る。盆踊りや秋祭りに出かける。当番も、PTAの役員もやる。地域の草刈りやそうじにもあたり前に参加する。レントゲンも予防注射も地域のひと。病院も地域ののを利用。」(近藤原理、1979)とある。

## 5. 考 察

社会的ネットワークは、「個人を中心としたフォーマル・インフォーマルな社会関係の網の目」(浜嶋朗他、1997)とある。また、「第1に、集団内関係に注目するのではなく、集団を離れて形成される関係や、集団を形成しないような関係に注目することが必要であり、かつ重要であるという認識にもとづいている。」(森岡清志、2006)とされ、福祉分野でも社会的ネットワークに焦点をあてた研究がなされている。

「なずな園」の地域交流は個人の社会的ネットワークの広がりであり、それは「なずな園」における役割出番や関係発達に地域に広がり、集団と個の共生が地域と個の共生に広がったと考えられる。それを支えたのがスタッフの地域交流でもあり、「なずな園」自体の地域での役割でもあった。

障害者の地域生活支援を考えると、居住支援、就労支援、余暇活動支援がよくあげられる。またそれは障害者の地域生活を支える大きな柱でもある。それを基にしながら当事者を生活者として捉えたとき、個人としての社会的ネットワークをどう広げていくかは非常に重要な課題であり、障害者の生活の質に大きな影響を与える。

「なずな園」の場合その社会的ネットワークの広がりが、地域へのとけ込みへとつながり、SさんやO君が亡くなったときに地域の人が炊き出しに手伝いにきてくれ、みんなで見送ってくれることにつながっていったと考えられる。

この「なずな園」のあたり前のつきあいを基本にし、役割出番や関係発達の中から見いだした障害者の個々の特性を日常の地域交流の中で活かし、個々の社会的ネットワークを広げていった実践モデルは、あたり前の生活者としての生活支援の中で非常に示唆に富むものであり、障害者の生活をより豊かにしていく上で欠かせないものである。

## 6. 今後の課題

本研究では、主宰者へのインタビューを通して、当時の状況を掘り起こし「なずな園」と地域交流の概略を示し、支え合い、社会的ネットワークを中心に論じてきた。今後も継続的な関係者へのインタビュー並びに地域調査等を実施し「なずな園」の地域生活支援の特質と地域福祉のあり方をさらに深めていきたい。

## 引用・参考文献

- ※ 天野正子. (2004). 『「生活者」とはだれか～自律的市民像の系譜』. 中央公論社.
- ※ 近藤原理. (1993). 『共生社会をめざして～私の障害者福祉実践小論～』. p2. 明治図書.
- ※ 近藤原理. (1979). 『ともに生きるということ』. p114. 明治図書.
- ※ 拙稿. (2008). 『家庭的な小集団生活施設における地域生活支援 (I)』 「九州ルーテル学院大学紀要V I S I O」第37号. pp39-45.
- ※ 寺谷隆子. (2008). 『精神障害者の相互支援システムの展開』. p42. 中央法規.
- ※ Charles. A. Rapp. (1998). 『精神障害者のためのケースマネジメント』. p56. 金剛出版.
- ※ 浜嶋朗他. (1997). 『社会学小辞典』. p266. 有斐閣.
- ※ 藤井達也. (2004). 『精神障害者生活支援研究～生活モデルにおける関係性の意義～』. 学文社.
- ※ 森岡清志. (2006). 『社会的ネットワーク論』. 新 睦人編. 「新しい社会学の歩み」. P225. 有斐閣.